

- 2) 消化管内容物マーカの平均滞留時間は低繊維飼料で固有24.0時間、液相23.4時間、高繊維飼料では固有17.4時間、液相17.0時間で、高繊維飼料では消化管内容物の通過速度が速くなる傾向が認められた。また消化管内で液相と固有の滞留時間に差がないことからウサギ等で見られるような液相内容物の選択貯留能はニホンザルの大腸には存在せず、内容物は分離される事なく均一に混合されながら移行することが推察される。この内容物移行パターンはウマ、ウォンバット等の比較的繊維消化能力の高い動物に類似している。
- 3) 以上の結果はニホンザルの消化管内で微生物の消化過程が活発に営まれていることを示しているが、微生物の活動によって生じる発酵産物が、どの程度動物の栄養要求に貢献しているかについては今後の重要な問題である。

コロブス類歯列弓形態の性差に関する研究

近藤信太郎 (岡山大・歯)

ディスクレパンシー (歯と顎骨の不調和) は人類文化の発達と進化の矛盾を背景として生じた一種の文明病とされている (井上他、1986)。瀬戸口 (1987) は野生のサル類にヒトと同様のディスクレパンシー型不正咬合が見られることを報告し、サル類の巨大な犬歯は不正咬合の様相をヒトと大きく変えていることを指摘している。本研究は野生サル類のディスクレパンシー解析の基礎資料の提供を目的とし、犬歯部に着目して歯列の性差を調査した。材料はアカコロブス (cbb) ♂4♀25、オリーブコロブス (cbv) ♂20♀25、キングコロブス (cbp) ♂4♀25の晒骨標本である。観察は歯列と咬合状態について行ない、計測は歯種ごとの上・下顎歯列弓長径と幅径、歯冠近遠心径について行なった。

(結果) コロブス類の咬合は下顎前突が多く、次いで切端咬合が多いが、咬合関係に性差はみられない。上顎小白歯部では70%以上の個体で歯列弓の狭窄がみられるが、この頻度は♂で高率であった。上・下顎小白歯の捻転は♀で高率に観察された。霊長空隙は上顎では全個体に存在したが、下顎では全体の約30%で見られたにすぎない。下顎では上顎の霊長空隙と同じ場所 (I_1-C_1) に空隙が見られることがあった。これは cbv♂と cbp

♀で高率に見られた。そのうちの1/3では下顎霊長空隙が見られず、 I_1-C_1 のみに空隙が見られた。

歯群ごとの歯の大きさ (歯冠近遠心径) および歯列弓長径・幅径の性的二型の程度を関係偏差 (Yamada & Sakai, 1983) と平均値間の T 検定によって比較した。歯の大きさは C-P、コンプレックス ($C' \cdot C_1 \cdot P_1$) に関係する項目 (上・下顎前歯群と下顎小白歯群) で性差が大きかった。歯列弓でも一般に C-P、コンプレックスに関係する項目で性差は大きい、下顎前歯群長径は cbv を除いて性差は小さく、これに関係する全ての項目で性差が大きい訳ではない。また上・下顎前歯群では歯列弓幅径が長径より大きい性差を示し、下顎小白歯群では長径で大きい性差を示した。上顎の小白歯群幅径は cbb で、前歯群長径は cbp で性差が小さかった。cbp は上・下顎大臼歯群に関係する項目で大きい性差を示した。このように項目によっては性差の現われ方に種間差がみられた。

糞線虫の感染様式に関する研究

金子清俊・角坂照貴 (愛知医大)

塩飽邦憲 (島根医大)

千種雄一 (独協医大)

人畜共通寄生虫病の原因となる *Strongyloides fulleborni* をニホンザルに実験感染させ prepatent period、排出虫卵数、血液学的検査を感染経過に伴い調べた。方法: グループケージから採便し濾紙培養で得た糞線虫フィラリア型幼虫を2頭 (雄・5才) に各4000匹接種し個別に飼育した。排出虫卵数および虫卵の発育分化については1~2回/月調査した。発育分化については、密度勾配遠心法で集卵した虫卵を Arizono (1976) の方法に従い30℃で濾紙培養した。約1.5年飼育後に剖検し寄生成虫数、寄生部位を調査した。結果: 感染後の症状は殆んどないか、きわめて軽度であり宿主によく適応している。prepatent period は2頭とも10日であり他の糞線虫と類似していた。排出虫卵数 (EPG) は、A個体は約2万、B個体は約1万まで増加した。EPG は、A個体では2ヶ月間高値を示したが7ヶ月後には1700まで減少した。B個体では感染5ヶ月後に1600まで減少した。しかし、翌年夏期に再増加し約3ヶ月間1万前後を